

傀儡師（復新三組盞）

へ蓬萊の島は目出度い島での 黄金樹にて米はかる 紗のしゃの袴紗の袴よの

へ竹田のむかしはやしごと 誰が今知らん傀儡師 阿波の鳴門を小唄とは 晋子が吟の風流や 古き合点でそのまゝに

へ小倉の野辺の一本芒 いつか穂に出て尾花とならば 露が嫉まん恋草や へ恋ぞ積りて渾となる 渾ぢゃごんせぬ花嫁に 仲人を入れて祝言も 四海波風穏やかに 下戸の振して口きかず物もよく縫い機も織り 心よさそなかみさまの へ三人もちし子宝の

へ総領息子は親に似て 色と名がつきや夜鷹でも ござでも巫女でも市子でも 可愛いかわいが落合うて 女に憂身やつしごと

へ二番息子は堅造で ぽき／＼折れるとげ茨

へ三番息子は色白で お寺小姓にやり梅の 吉三と名をも夕日かげ へそれとお七はうしろから

へ見る目可愛き水仙の 初に根締のうれしさに恋という字の書初を 湯島にかけし筆つばな へ八百屋万の神さんに 堅く誓いし縁結び 必ずやいの寄添えば へそこらへひよつくり弁長が いや／＼色のみばえだち 差合くらずに やつてくりよ

へやれエどらがによらい へやれ／＼／＼／＼／＼おぼくれちよんがれちよ そこらでちよつくらちよつと聞いてもくんねエ 嘘ぢゃござらぬ 本郷辺りの八百屋のお娘が 十六さゝげになんねえ先から へ末は芽うどに 奈良漬なんぞと 胡麻せた固めを 松露のしるしに きしょうが書いたり 小指を胡瓜や さりとは／＼／＼うるせえこんだに へ奇妙頂礼どら娘 へこれはさておき

へ既に源氏のおん大将 御曹子にてまします頃 長者が姫と語らおも 小男鹿ならで笛による 想夫連理の恋すちよう 惜しあかつきのかごとにも

へ矢矧の橋は長けれど 逢うたその夜の短かさよ よい／＼／＼／＼／＼よいやさよいやさおのこ へ敵と数度の戦いに 勝どきあげ

へそもそもこれは 桓武天皇九代の後胤 平の知盛幽霊なり アラ珍らしや如何に どうでエ義公 娑婆以来

へ馴染の弁州伊勢駿河 早く盃さあさし汐 吸物椀にて叶うまじと 浮いて散らして拍子どり

へ眺めありおう箱鼓 とり／＼なれや鳥籠と 替ればぱつと忽ちにすゝめ追わえて慕いゆく 雀追わえてしたい行く